

## 聴覚障害者と健聴者のコミュニケーションに壁はあるのか

21FQ036 小針彩香

### はじめに

私が初めて声を使わずに会話をしている2人を見た日をよく覚えている。コミュニケーションは声を使うことが当たり前の生活を送っていた高校生の私にとってそれは衝撃であった。彼らは手話を使って会話をしていた。その2人は私が写真を撮りたい場所に座って話し込んでいて、よけてもらいたかったが話しかけるのを躊躇してしまった。健聴者に話しかけるよりも壁を感じた。手話に触れる機会も、聴覚障害者と交流する機会もなかった私には外国語を話しているように見えて、話しかけにくい印象を受けたのだ。この体験からコミュニケーションをとるとき何が聴覚障害者と健聴者の間に壁を作ってしまうのか疑問に思った。だから、この機会にこのことについて考えてみることにした。健聴者と聴覚障害者の共生社会を作るコミュニケーションに主に焦点を当てて論述していきたいと思う。

### 1. 聴覚障害について

#### 1-1. 聴覚障害とは

聴覚障害とは医学的に、外部の音声情報を脳に送るための部位のいずれかに障害があるために、聞こえにくかったり、聞こえなかったりする状態のことを言う。<sup>1</sup>聴覚障害者と聞くと全く聞こえないと勘違いする人もいるのではないだろうか。私も勘違いしている一人であった。聴覚障害を持っているということは何も聞こえない世界で、みんなが同じ障害を持っているものだと思っていたがそれは間違いであった。聴覚障害といっても、障害の種類や程度には個人差があるのである。

#### 1-2. 聴覚障害の種類

聴覚障害の種類は、原因となる病変が聴覚組織のどこに起こっているかで分けられている。外耳から中耳にかけての障害を「伝音難聴」、内耳から聴神経、脳の障害による障害を「感音難聴」という。そしてその両方の障害があることを「混合性難聴」という。伝音難聴は音が小さく聞こえるのに対し、感音難聴は音が歪んで聞こえるという特徴がある。加齢によって聞こえが悪くなることの多くは感音性難聴の一種である。伝音難聴の場合、補聴器を活用することで会話ができることが多い。それに対し、感音難聴は音が歪んで聞こえるためただ音を大きくしても言葉として伝わりにくい。<sup>2</sup>聴覚障害とはただ音が小さくて聞こえに

くい状態を指すとは一概に言えないのである。健聴者の中で「音が歪む」という感覚を体験する人は多くはないだろう。健聴者にとって経験がないことだからこそ知識として蓄えておきたいことである。

## 2. 聴覚障害の程度

|       |               |                                                          |
|-------|---------------|----------------------------------------------------------|
| 正常    | 0dB～<br>24dB  |                                                          |
| 軽度難聴  | 25dB～<br>39dB | 小さな声や雑音下での会話の聞き間違いや聞き取り困難を自覚する。改善目的によっては、補聴器の適応となることもある。 |
| 中等度難聴 | 40dB～<br>69dB | 普通の大きさの声の会話の聞き間違いや聞き取り困難を自覚する。補聴器のよい適応となる。               |
| 高度難聴  | 70dB～<br>89dB | 非常に大きい声か補聴器を用いないと会話が聞こえない。しかし、聞こえても聞き取りには限界がある。          |
| 重度難聴  | 90dB～         | 補聴器でも聞き取れないことが多く、人工内耳の装用が考慮される。                          |

図1.難聴の程度

図1は難聴の程度について表している。<sup>3</sup>図を見てわかるように、難聴の程度は「軽度」、「中等度」、「高度」、「重度」がある。聴覚障害の程度は、dB（デシベル）で表される。dBとは音圧のことである。難聴の程度が4つに分けられることはあまり知られていないのではないだろうか。聴覚障害を持つ方を見た目から判断することは難しい。そして、難聴の程度を把握することは見た目からは極めて困難であるため、あらかじめ知識として入れておくのがよい。図1を見てわかるように軽度難聴は小さな声が聞き取りにくいと感じる。中等度難聴は普段の会話が聞き取りにくいと感じる。高度難聴は大きい声を聞き取りにくいと感じる。重度難聴は補聴器でも聞き取りにくくなり、日常の音がほとんど聞き取れない。

軽度難聴と重度難聴を比べるとかなりの差があることがわかる。

身体障害者福祉法に基づく身体障害レベルでは、聴覚障害は軽いほうから、6級、4級、3級、2級、がある。<sup>4</sup>一番軽い6級は両耳の聴力レベルが70デシベル以上のもの、4級は両耳の聴力レベルがそれぞれ80デシベル以上のもの、3級は両耳の聴力レベルが90デシベル以上の者、一番重い2級が両耳の聴力レベルがそれぞれ100デシベル以上のものとなっている。

### 3. 聴覚障害者のコミュニケーション

聴覚障害を持つ人のコミュニケーション手段には筆談、音声認識アプリ、口話、手話を使うというものがある。実際アルバイト先で、聴覚障害を持った客を接客した際どう対応するのが適切なのか焦りからとっさに判断できなかった経験がある。その場で一番わかりやすく案内できた方法は筆談ではないかと後から思い返した。伝えたいことを文字にして伝えれば、誤解もなく正確に客を案内できるからである。紙とペンがないとき、スマートフォンやタブレットに文字を打って見せる手段もある。もっと円滑に自分の気持ちを相手に伝える手段として音声認識アプリを使うこともできる。そのひとつに「こえとら」というものがある。「こえとら」というアプリの主な特長として、「聴覚障害者が入力した文字を音声で再生するとともに、健聴者が入力した音声を文字で表示することで、両者の円滑なコミュニケーションを支援。」「よく使う文が定型文として登録されており、さらに、利用者自身がよく使う文を追加登録することにより、文字の入力をより簡単に行うことが可能。」とある。音声を読み取ってくれるため、筆談よりもスムーズに会話が可能で、健聴者は伝えたい言葉をすべて相手に届けることができる。聴覚障害者が文字を入力するときもよく使う文を登録することができるため、何度も同じ文章を入力する手間を省くことができる非常に便利なコミュニケーションツールである。<sup>5</sup>筆談や音声認識アプリは何か文字を起こして言葉を伝え合うが、文字を起こさずにコミュニケーションをとることができる手段も存在する。それが口話や手話である。口話とは口の動きを読み取り言葉を理解する「読話」と、自分でも声を出し言葉を伝える「口話」を組み合わせたコミュニケーションのことを言う。しかし、マスクをつけて生活するのが当たり前となった今、口の動きを見て読み取りをすることは困難である。マスクの存在は手話を使って会話をするときにも支障をきたす。表情がわかりにくいからである。手話を使って会話をするとき、表情はとても大切な役割を担っている。手を動かすのと同時に表情でも表現することによって強弱や感情を言葉に乗せることができる。手話には大きく分けて「日本手話」と「日本対応手話」というものがある。日本手話は言語的な側面から見て日本語とは大きく異なる言語である。<sup>6</sup>一方、「日本対応手話」は日本語の文章の単語ごとに手話を対応させている。手話の習得には時間を要する。ほとんどの健聴者は幼いころから日常生活で手話に触れる機会が少ないのではないだろうか。手話という言語に幼少期から触れておくことは聴覚障害者のことを知るきっかけにもなる重要なこ

とである。

#### 4. 聴覚への依存

私は大学生になって聴覚障害を持つ後輩と知り合いになった。「聴覚に障害があって自転車に乗るのは怖いと感じないのか。」疑問に思っていたことを聞いてみたことがある。すると彼は「聴覚障害がある分、目でしっかり確かめているから大丈夫、健聴者がイヤホンをして歩いているのが危なく思う。」と答えた。その時に私は聴覚に、音に、依存していたことに気づかされたのである。

日常生活で気づかないうちに視覚から得られる情報はたくさんある。そのうちのひとつが「字幕」である。字幕が付いているものといえば、動画配信サービス YouTube や、JR の列車の中に設置された動画版の車内広告、テレビにも字幕機能が搭載されている。<sup>7</sup>字幕というのは限られた聴覚障害者向けの特別な情報保障であり、情報保障を必要としない人には無用であるという考え方があった。しかし、健聴者が字幕を必要としている場面は意外と多く存在するのである。<sup>8</sup>字幕に焦点を当て技術が進化すればあらゆる可能性が広がる。「字幕によって違う文化や言語の人が多様な文化をシェアできる日が訪れれば、世界の実に多様な文化の相互理解を促すだろう。」<sup>9</sup>視覚の情報は相互理解の可能性を高めてくれるのである。聴覚だけに頼ったコミュニケーションをとろうとしていた自分に気づくことができた。字幕を使って視覚でコミュニケーションをとることに力を入れてみるという発想に力を注いでいくべきである。

#### 5. 共生社会を作るには

「私たちは、くり返し、相手を知る努力、自身を知ってもらう努力を続ける必要がある。ろう者と健聴者の間に横たわる壁も、ろう者と中途失聴者との間に横たわる壁も、お互い、伝え合い、理解し合うことを目指さない限りこわすことはできない。」<sup>10</sup> 壁を壊してゆくために、もっと障害のことについて知識を増やす時間が必要である。「わからない」という感情は人を不安にさせる。私が初めて手話を使っている人たちを見た環境には「わからない」が多かったのだと思う。手話で何を話しているのかわからず、聴覚障害を持っている人はどんな環境の中で生活しているのかも全く知らなかった。そんな自分の状態が不安を引き起こして、話しかけにくいと壁を作ってしまったのである。

「もしかしたら、ろう者に見えることが聴者には見えない、ということが、多くあるのかもしれない。音声の世界に目を向けるのではなく、ろう児の见ている世界に目を向けてみれば、新しい発見が次々と出てくるかもしれない。」<sup>11</sup> 大学生活で聴覚障害を持った学生と交流する機会が増えた。自分の当たり前がいかに思い込みにとらわれていたのかを実感する。そして時にコミュニケーションの難しさを感じる。聴覚障害者と会話をしているとき、気づ

くと伝えるということにまっすぐに向き合ってた。今、目の前にいる人に伝えるということに障害は関係ない。健聴者でも聴覚障害者でも伝えたいという気持ちに違いはない。健聴者の世界と聴覚障害者の世界を理解し、共有していくことが大切になる。お互いを尊重し、一歩踏み込んでみる勇気が必要である。異なる文化や常識を知り、未知の世界に興味を抱くと共に歩み寄れるきっかけを作ることができる。そこから共生社会の未来は近づいてくる。

## 6. おわりに

この論文を書くにあたって聴覚障害の種類や程度、聴覚障害者が使っているコミュニケーションツールを調べ上げたことで、あの時感じた壁は薄くなったように感じる。健聴者同士でも見知らぬ人に話しかけることには少し抵抗がある。どのような人物なのか全く分からず、話しかけた後の未来が予測できないからである。では聴覚障害者に話しかけると、さらに厚い壁を感じてしまうのは、話しかける前からコミュニケーションの取り方がわからないことが原因としてある。健聴者とのコミュニケーションよりも一歩手前で踏みとどまってしまう。聴覚障害の知識も経験もないためコミュニケーションの入り口に立つ勇気が持てないのだ。聴覚障害者と健聴者の豊かな共生社会を育むには相互理解が必須である。幼少期から共生している様々な人々との交流する機会を大切にし、お互いを知る時間を設けるべきである。そして相手を理解しようとする姿勢と同時に、自分を主張することも大事である。一歩方向に気持ちを向けるのではなく双方向に矢印を向けてみる。字幕のように、聴覚障害者も健聴者も生活が彩るような何かが生まれるかもしれない、もしくは今ある予想もしない何かが進化するかもしれない。聴覚障害者と健聴者が溶け込んでいく社会が共生社会である。「伝えたい」という意思があればだれとでもコミュニケーションをとることができる。異文化、慣れないコミュニケーションに慣れることがまた壁を壊していく手段である。聴覚障害者と健聴者との間にできてしまう壁は歩み寄ることで消えてゆく。壁が薄くなり、壊されていくその先に聴覚障害者と健聴者の共生社会が広がっているのである。

## 引用・参考文献

---

<sup>1</sup> <https://ds.adm.u-tokyo.ac.jp/receive-support/hearing.html> 東京大学 バリアフリー支援室 最終閲覧日：2022.11.28

<sup>2</sup> <https://www.suretalk.mb.softbank.jp/column/contents/000100.php> SureTalk 聴覚障がい「種類」や「分類」を知れば配慮すべきことも判りやすくなる 最終閲覧日：2022.11.28

<sup>3</sup>[https://works.litalico.jp/column/physical\\_disability/006/](https://works.litalico.jp/column/physical_disability/006/) LITALICO ワークス 難聴の程度（レベル）について 最終閲覧日 2022.11.29

<sup>4</sup><https://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/shougaishatechou/dl/toukyu.pdf> 厚生労働省 身体障害者程度等級表 最終閲覧日 2022.11.29

<sup>5</sup>[https://www.soumu.go.jp/menu\\_news/s-news/01kiban05\\_02000088.html](https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01kiban05_02000088.html) 総務省 聴覚障害者支援アプリ「こえとら」を機能拡充 最終閲覧日 2022.11.29

<sup>6</sup><https://snabi.jp/article/159> LITALICO 仕事ナビ 聴覚障害者のコミュニケーション手段 最終閲覧日 2022.11.29

<sup>7</sup>柴田邦臣/吉田仁美/井上滋樹 字幕とメディアの新展開 様々な人々を包摂する府寿司社会と共生のリテラシー 三松堂 （2016.4.10）18 項

<sup>8</sup>同上 27 項

<sup>9</sup>同上 159 項

<sup>10</sup>佐々木倫子 ろう者から見た「多文化共生」もう一つの言語的マイノリティ 株式会社コ出版 （2012.6.10） xvii

<sup>11</sup>佐々木倫子 前掲書 205 項～206 項